

古代中国語の指示詞とその文法化について

李 長波

1 はじめに

古代中国語の繫辞「是」に関する従来の研究は、繫辞「是」が初めて文献に現われたのは何時なのか、その前身は何だったのかというこの二点をめぐって展開されてきたと見ることが出来る。今のところ、この二点は共に定説を見るに至っていないのが現状であるが、繫辞「是」の最初の用例については、裘（1979）によって馬王堆漢墓出土の彗星図（戦国後期のものと推定される）に繫辞「是」の用例があることが指摘されるにいたって、おそくとも戦国後期には既に繫辞「是」が生まれていたことが明らかになった。そのために洪（1958）及び王（1958a, 1958b）以来、繫辞の出現が漢・王充『論衡』（紀元一世紀）を最初とする通説は見なおされることになった¹。

一方、繫辞「是」の前身はいったい何だったのかについては、これまで王（1937）をはじめ、周（1987）のように指示詞「是」を繫辞「是」の前身とする説が通説になっていたが、最近では、馮（1984）と Sian L. Yen（顔祥霖, 1986）のように、肯定や是認を表わす形容詞「是」と肯定詞 (affirmative particle) の「是」から生まれたとする説が現れた。いまのところ、この二つの説が相対峙し、互いに譲らずの様相を呈している。

どの文献のどの用例を以て、繫辞「是」の最初の用例とするかということは、それ自

¹馬王堆出土の彗星図にある「是」の用例は次の通りである。

- 13. 是是帝彗、有内兵、年大孰（熟）。
- 15. 是是竹彗、人主有死者。
- 17. 是是蒿彗、軍起、兵幾（饑）。
- 19. 是是苦彗、天下兵起、若在外歸。
- 22. 是是苦發彗、兵起幾（饑）。

これについては、裘（1979）は、「これらの例の二つ目の「是」は明らかに繫辞であり、この本は漢の初期の人によって抄録されたものであるが、その内容から見て、原書は戦国後期楚の人の著作であろう。従って、繫辞「是」は恐らく戦国後期に既に生まれていたものと思われる」（p.440）としている。

因みに、管見の限りこの彗星図の存在を最初に図版付で報告したのは席（1978）である。なお、引用に際し本稿は席（1978）によったほか、番号以下全文を引用することにした。

体大変興味深い問題には違いない。しかし、筆者はかかる繫辞が生まれるまでにたどった遥かなる道筋こそ大事と考える。もし繫辞「是」が生れ乍らの繫辞ではなく、何か別の意味を持った語から生まれたのだとすれば、それが繫辞として確立されていくその文法化の過程こそ、筆者の興味を覚える所である。そして、もしその成立に幾つかの段階(stages)が認められるとしたら、その幾つかの段階(stages)の間にも当然ある連続性が存在するであろうと予想される。この連続性にこそ「是」が「繫辞」として成立していくことの必然性、ひいては古代中国語が「繫辞」という文法範疇を獲得していくそのことの必然性が秘められていると考えるのである。

以上の考えに基づいて、本稿では繫辞「是」の前身は何か、それが何故、如何にして繫辞になっていったのかに焦点を絞って考察することにしたい。

2 繫辞「是」の生まれるすじみち

先に触れたように、繫辞「是」の前身が何であったのかという問題については、今のところ、二つの説が出されている。その一つは、王(1937)をはじめ、周(1987)のように指示詞「是」から生まれたとする説であり、もう一つは、馮(1984)と Sian L. Yen (顔祥霖, 1986) のように、肯定や是認を表わす形容詞「是」と肯定詞(affirmative particle)「是」から生まれたとする説である。ここではしばらくこの2つの説の根拠とするとところを見てみることにしたい。

まず注目したいのは、Sian L. Yen (1986) は近称指示詞「是」とほぼ同じ構文的状況に用いられる近称指示詞「此」が繫辞化しなかったことを、繫辞「是」を指示詞「是」からではなく、肯定詞「是」から派生したとする説の主な根拠として挙げていることである(p.228, p.235)。もちろん、近称「是」が繫辞化したのに対して、近称「此」が繫辞化しなかったのは歴とした事実である。しかし、同じ近称指示詞でも、先秦時代の「是」は現場指示の例において「此」と僅かに重なりつつも、前方照応の機能に優れているのに対し、「此」はむしろ現前する物的対象を指すのに偏っている傾向が認められる。そして、このような傾向は恐らく「是」の前身である「時」(甲骨文字では、「之」に従い、又「日」に従うもので、「今」の意と言われる²)が時間的な「今」を表わすものであったことによるものと考えられよう。時間的な「今」が時間軸上線状的に展開される談話の前方照応に用いられるのは自然の理にかなっているからである。ここで

² 「時」と「是」の関係については黄(1983)に詳しい論証があり、筆者もこれに従う。因みに語源的に「時(是)」が時間性を持つ語であったのに対し「此」は語源的に場所性に優れているようである。

仮に繫辞「是」が指示詞「是」から転用したものだという立場に立てば、「此」よりも「是」のほうがこの前方照応的な用法においてすでに繫辞化しやすい素地を充分持っていたと見ることができよう。そうだとすれば、Sian L.Yen (1986) のように、「此」が繫辞化しなかったことを以て、指示詞「是」から繫辞が生まれたことの反証とするのはいささか短絡的すぎる嫌いがあることは否めない事実として首肯されよう。

因みに、なぜ「此」が繫辞化しなかったことに関連して、周 (1959) は、甲骨文や西周の金文には「此」の用例がなく、やや時代の遅い金文に初めて現われているほか、『書経』には計 3 例（「無逸」に 2 例、「立政」に 1 例）あるのみであり、『易経』の文言に 1 例、繫辞傳に 15 例、説卦に 1 例ある。『詩経』には「此」は多数用いられているが、『論語』には「此」がなく、代わりに「斯」を用いているとしている。そして更に、周 (1987) において、「此」が繫辞化しなかった原因は、甲骨文字、殷及び西周金文と『論語』における「此」の使用頻度が低いこと、そして、「正しい・正しくない」という意味の形容詞「是非」がよく用いられていたということの 2 点にまとめられている (p.89)。

しかし、ここに言う第 1 点については、「此」の使用頻度が低いことは必ずしも一概には言えないようである。甲骨文字には「此」はもちろん「是」も認められないので、比較のすべがないが、西周の金文には既に「是」が現れ、それより遅い時期に「此」が現れているようである。

裘 (1979) によれば、「是」の最初の用例は周の昭王（紀元前 1052-1002 在位）前後の製造と推定されている沈子簋にある「懿父迺（乃）是子」という (p.440)。他にも、管 (1981) は、西周の金文の「是」の用例を 4 例報告しており、何れも目的語として使われていたものである (p.74, pp.174-175)。

金文の「此」の用例については、管 (1981) は報告していないが、容 (1929) によって西周より遅いと思われる次の 2 例が報告されている。

- 余鑄 此 鬲兒 (居毀)
- 余冉鑄 此 鉦口 (余冉鉦)

西周及びそれ以降の時代の金文で見える限り、全体的に「是」が目的語として用いられ、動詞の前に置かれるのに対して、「此」は連体詞或いは連体修飾的に用いられる傾向が強いようである。「此」と「是」は構文機能において相補的な分布を示していたものと思われる。もしそうだとすれば、金文における「此」と「是」も同じ統語環境に共存し

ない以上、両者の使用頻度を単純な統計によって比較することは出来ないと思われる。

一方、「此」と「是」が共存する先秦時代の文献のなかでも、例えば『詩經』(18:86)、『易經』(7:17)、『春秋・公羊傳』(41:163)、『春秋・穀梁傳』(70:97)、『墨子』(181:560)、『楚辭』(1:27)のように、逆に「是」よりも「此」のほうが使用頻度が高い場合もある³。従って、「此」の使用頻度の低さがその繫辭化を阻害したとする周(1987)の説は妥当ではないことが明らかである。

そして、周(1987)が根拠として挙げている『論語』に「此」が1例も認められないことについては、黄(1983)ですでに指摘されたように、「此」と「此」のかわりに用いられる「斯」(30例)との方言的な位相差によるものであり、「斯」は魯方言の指示詞であると解すべきであろう。ともあれ、周(1987)が指摘したように、「是非」の慣用が一般化したことも、「是」が繫辭化したのに対し、「此」が繫辭化しなかった一因であることは充分傾聴すべき考えであろう。そして、後述するように、形容詞「是」と名詞「是」が否定の意を表わす「非」⁴と対義語関係にあるのに対し、「此」は「非」とは対義関係になかったことにもその原因の一端が求められるのではないと思われる。

以上は、馮(1984)とSian L.Yen(1986)が示した根拠のうちいわば外的な要因と思われるものについての指摘であるが、問題は更に、繫辭「是」は肯定や是認を表わす形容詞「是」と肯定詞(affirmative particle)「是」から派生したとする馮(1984)とSian L.Yen(1986)の仮説の根拠とされる言語事実そのものにもあるようである。

まず、Sian L.Yen(1986)の挙げた用例を見てみよう。Sian L.Yen(1986)が肯定詞「是」として挙げているのは、例えば以下のような例である。

- 則王莽所致鳥鳳皇也。如審是王莽致之、是非瑞也。《『論衡・講瑞』》
- 汝是為臣下非法。《『三国志・吳志』卷十甘寧傳》

この2例についてまず指摘しなければならないのは、これらの用例は、裘(1979)が初めて指摘した彗星図の用例より二三百年も後のものであり、これによって肯定詞「是」を繫辭「是」の前身とするには、文献の前後関係に明らかに矛盾することである。した

³この点については、恐らく周(1987)は事実を誤認している節があるかも知れない。因みに、ここの統計数字は黄(1983)に依った。

⁴因みに、甲骨文字から先秦時代の文献にかけてはこの「非(匪)」は否定を表わす繫辭として用いられ、否定繫辭「非(匪)」の用法は繫辭「是」の用法より古いことも注目に値しよう。否定繫辭が肯定繫辭より発生的に早いのは、恐らく肯定繫辭が無標(unmarked)であるのに対し、否定繫辭が有標(marked)だからであると考えられる。

がって、これは肯定詞「是」を繫辞「是」の前身とする根拠にはならないと考えなければならない。

このように、繫辞「是」は肯定や是認を表わす形容詞「是」と肯定詞 (affirmative particle) 「是」から派生したとする馮 (1984) と Sian L.Yen (1986) にとってのもっとも否定的な事実は恐らく両者が挙げた形容詞「是」と肯定詞 (affirmative particle) 「是」の用例は共に「彗星図」の用例よりかなり遅い時代のものであることに尽きようである。そして、Sian L.Yen (1986) では、肯定や是認を表わす「是」が如何にしてその意味を獲得したのか、更にその前身は何かだったのかについてはまったく触れていないばかりか、所謂肯定詞「是」と指示詞「是」とは無関係であるとする Sian L.Yen (1986) の説も根拠が弱いように思われる。

一方、周 (1987) の挙げた「正しい・正しくない」という意味の「是非」の例はどうか。周 (1987) の挙げたのは次のような例である。

- 無 是非 之心、非人也、・・・・・・是非之心、智之端也。(『孟子・公孫丑』上)
- 彼亦一 是非、此亦一 是非。(『莊子・齊物論』)

この2例については、まずこれらの「是非」の用例はいわゆる「是非」の名詞用法であり、厳密には「正しいこと・正しくないこと」としなければならないことに注目したい。そして、周 (1987) ではこのような「是非」と指示詞「是」との意味的な関係についてはまったく触れていないばかりか、この「是非」と繫辞「是」とは、発生的に、又は原理的に如何なる関係にあるかについても具体的な言及がなされていない。これも問題点として指摘することが出来よう。

要するに、Sian L.Yen (1986) の指摘した肯定詞「是」や周 (1987) の挙げたような「是非」に比べれば、指示詞「是」は甲骨文字にこそ見えないが、周代以降の金文、『易経』、『書経』、『詩経』などの文字資料や文献に多数現われていることは周知の所である。恐らく文献に現われる順番からすれば、指示詞「是」は繫辞「是」より発生的に早いことはもちろん、肯定詞「是」よりも発生的に早い、とみて間違いないようである。そして、指示詞「是」が肯定詞「是」より早く文献に現れているということは、恐らく指示詞「是」によって肯定詞「是」の意味派生を考えなければならないことを示唆するように思われる。因みに形容詞「是」の用例は、例えば次の『論語』の例である。

- 子曰、二三子、偃之言 是 也。(『論語・陽貨』)

このように、仮に彗星図の用例をその最古とする説に従えば、少なくともいわゆる繫辞「是」に先行すると思われる「是」には、指示詞、形容詞、名詞の三つがあったものと思われる。要は、「是」の前身を指示詞とするか、それとも形容詞または肯定詞とするかのような二者択一ではなく、古代中国語において繫辞「是」が如何にして生まれえたのかという文法化の過程とその必然性を明らかにしなければならないことといえよう。繫辞「是」と同じ語形を有する形容詞「是」、肯定詞「是」、指示詞「是」はやはり何らかの形で、繫辞「是」に関連を持つのではないかとと思われるからである。たとえば繫辞「是」に先行する「是」はその品詞は何であろうと、やはり「是」の繫辞化になんらかの形で関わっていたはずであるし、仮に繫辞「是」に発生的に或いは文献に現れるのが遅い「是」でもその品詞の如何にかかわらず何らかの形で繫辞「是」と意味的な関連があるのではないかと予想される。要するに、繫辞「是」を取り巻くところの、同じ「是」の語形を共有する一連の「是」は恐らく同次元において、同じ程度に繫辞「是」と関係を有するのではなく、時間的にも次元的にもそれぞれ異なる関係のあり方があるのではないかと考えられる。

ここで我々は改めて繫辞「是」の生まれるすじみちをより時間的且つ多角的にとらえる必要に迫られる。

もし仮に以上に述べたことが支持され、肯定詞「是」と繫辞「是」との発生的な関係が否定されることになれば、繫辞「是」の前身、或いはその派生に何らかの形で関わっていた可能性があるのは、発生的に繫辞「是」に先行していると思われる、指示詞「是」と形容詞「是」、それに名詞「是非」に限られることになる。

以上に見てきた先行研究の問題点を踏まえて、本稿はまず、指示詞「是」と、形容詞「是」、それに肯定、是認を表わす「是」(以下 Sian L. Yen (1986) に従って、「肯定詞」の「是」としておく)と、繫辞「是」との意味的関連があるかないかということについて考察を加えることにしたい。ここでこの三者の関係を明らかにするために、文献に現われる「是」の用例を統計的に分析したい。ここに用いる主な文献は、『書経』、『易経』、『論語』、『孟子』、『莊子』などである。精確を期すためには、勿論、先秦時代とそれ以前の文献のすべてに互って統計数字を出すことが望ましいが、これらの書物の前後関係がはっきりしていることに加え、これらの文献に現われる「是」の用法が既に「是」の使い方の史的な変化と思われるある顕著な傾向を示しているので、現段階で文献の範囲

を以上の数種類に止めた。

まず『書經』に用いられている「是」の用例を見てみることにする⁵。

『書經』に用いる「是」(延べ語数：30 例)

是(指示詞の単独用法)	20 例
惟～是～	2 例
是～是～	(4 箇所) 8 例

因みに『書經』の「是～是～」の文型で用いられる用例を挙げると、次のようになる。

- 是崇是長、是信是使。(『書經・秦誓下/牧誓』)
- 凡厥庶民、極之敷言。是訓是行、以近天子之光。(『書經・洪範』)

このような「是～是～」の文型は他には『詩經』に 16 例見られ、目的語の指示詞が動詞の前に前置される場合に用いられ、指示詞「是」の古い用法と思われる。

次に『易經』の「是」の使い方の統計数字を挙げる。

『易經』の「上經・下經」と「繫辭傳」の成立年代には隔たりがあり、しかも、成立年代の異なるこの二つの部分がそのまま時代の流れを反映していると思われるので、分けて統計数字を挙げる。

『易經・上經/下經』(延べ語数：25 例)

是(指示詞の単独用法)	2 例	
是以	19 例	
是故	1 例	以上 22 例 88 %
是・・・・也	2 例	8 %
是(形容詞)	1 例	4 %

『易經/繫辭傳』(延べ語数：45 例)

是(指示詞の単独用法)	2 例
是以	11 例
是故	30 例

⁵以下に用いる統計数字は、「是」の延べ語数を集計したものである。一つの例文の中に複数の「是」が使われる場合は、複数の「是」を数えた。

於是	1 例	以上 44 例	97.78 %
是（形容詞）	1 例		2.22 %

ここでひとまず『書經』から『易經』までの「是」の用法を概観してみると、まず注目すべきは、『易經』の「上經/下經」と「繫辭傳の部」には「是～是～」の文型がなく、逆に「是（指示詞・主部）……也」の文型が『易經・上經/下經』に現れていることである。次の例を参照されたい。

- 彖曰、泰、小往大來、吉亨。則是天地交而萬物通也。（『易經/上經』）

彖に曰く、「泰は小往き大來る、吉にして亨」とは、則ち是れ天地交はりて萬物通ずるなり。

この「是（指示詞・主部）……也」の文型は「是」（指示詞）を主語とする主部と、文末に判断を表わす虚詞「也」が付く述部からなっている。そして「是」は先行文脈の「小往大來吉亨」を承けながら、主語として働き、そして述部の「也」と呼応する。

ここで注目したいのは、後の繫辭「是」もまさに主語名詞と述語名詞との間におかれるものだということである。この「是」はなお先行文脈との間に照応関係がはっきり認められるために、品詞的には依然指示詞にとどまっているものの、このことさえ除けば、このような主語として働く指示詞の「是」は外見上、後の繫辭とは全く同じ構文的位置に置かれていることは、指示詞「是」の繫辭化を考える上で興味深い現象である⁶。後はこのような「是（主部）……也」の文型における指示詞「是」の指示性が低下し、先行文脈との照応関係がなくなれば、もはや繫辭として自立するのを待つばかりになっている感がある。このように、指示詞「是」はまずはこうした「是……也」の形式において構文的に繫辭への可能性を秘めていたとみることができる。

因みに、『書經』と『易經』には指示詞「是」の連体詞的な用法が見られないが、これは恐らく文献の量が少ないうえ、指示詞の延べ語数もそれほど多くないことによるものと考えられる。「是」の連体詞的な用法そのものはすでに金文にもあったもので、その存在は裘（1979）と管（1981）によって確認することが出来る。

次に『論語』、『孟子』、『莊子』における「是」の用例の統計数字を順に挙げる。

⁶ここで注意したいのは、古代中国語・近代中国語だけでなく、現代中国語においても主語は構文的に義務的な要素ではないことである。ここに言う二つの構文の類似性は主語が構文的に選択的な要素であることを勘案すれば、あながち両者の間の形式的な類似に終わるものではないかも知れない。

『論語』に用いる「是」（延べ語数：59 例）

是(指示詞の単独用法)	24 例		
是(指示詞の連体修飾用法)	7 例		
是以	4 例		
是故	2 例		
於是	0 例	以上 37 例	62.71 %
是・・・・・也	13 例		22.03 %
是・・・・・與	3 例		5.09 %
是也(述部)	2 例		3.39 %
是(形容詞)	1 例		1.69 %
その他	3 例		5.09 %

『孟子』に用いる「是」（延べ語数：252 例）

是(指示詞の単独用法)	82 例		
是(指示詞の連体修飾用法)	22 例		
是以	11 例		
是故	17 例		
於是	2 例	以上 134 例	53.18 %
是・・・・・也	87 例		34.52 %
是也(述部)	14 例		5.56 %
是(形容詞の単独用法)	2 例		0.79 %
是(非と対比的に用いられる)	3 例		1.19 %
是非(熟語としての名詞用法)	4 例		1.59 %
その他	8 例		3.17 %

『莊子』に用いる「是」（延べ語数：469 例）

是(指示詞の単独用法)			
是(指示詞の連体修飾用法)	以上 255 例	(54.37 %)	
是以	32 例		
是故	22 例		
於是(乎、焉)	28 例	以上 337 例	71.86 %
是・・・・・也	79 例		16.84 %

是也(述部)	12 例	2.56 %
是(非と対比的に用いられる)	13 例	2.77 %
是非(熟語としての名詞用法)	28 例	5.97 %

この三つの文献でまず注目したいのは、『易經』に見られた「是(指示詞)・・・・也」の形式が一貫して増加する傾向にあることである。そして、『論語』から『孟子』をへて更に『莊子』においても、「是也」の形で「是」が述部に用いられるようになったことも『易經』になかった用法として注目してよいであろう。

上に挙げた『易經』、『論語』、『孟子』、『莊子』における「是」の使い方の統計数字を通観するに、およそ以下の2点が指摘できよう。

1. 管見の限り、肯定詞「是」は上記文献には認められないが、形容詞「是」の出現は、『易經』の上經・下經の一例を最初とすることができる。しかし、これは『易經』の本文ではなく、文言という形で孔子に仮託したとされる解説の中の用法であるため、成立の遅い「繫辭傳」の用例と共に、『論語』や『孟子』の中の諸例との前後関係ははっきりしない。それでも指示詞「是」の出現は形容詞「是」や名詞「是非」より早いだけでなく、繫辭「是」よりも早いとみて間違いないようである。

2. 「是」の用法は『書經』『易經/上經・下經』から『論語』『孟子』をへて、『莊子』にかけて、全体的に用例の増加と、用法の多様化の傾向がはっきり認められる。

就中指示詞「是」の用法が『易經/上經・下經』における絶対的な優位から『論語』、『孟子』、『莊子』における相対的な優位に変わっているのに平行して、「是・・・・也」と「是也(述部)」の用法と、名詞「是非」の用法が増えていることが注目される。

そして、「是・・・・也」の形式が『易經』から『論語』、『孟子』、『莊子』において一貫して観察されているのに対し、形容詞「是」は、『易經/上經・下經』の一例、『易經・繫辭傳』の一例を除けば、『論語』に一例、『孟子』に二例あるだけに止まっている。

一方、名詞「是(是非)」は『孟子』に初めて現われ、「是・・・・也」の用法や形容詞「是」に遅れて発生した可能性が高いようである。いずれにせよ、「是・・・・也」と「是也(述部)」の二つの文型には、形容詞「是」や名詞「是非」だけではなく、指示詞「是」から繫辭「是」が生まれる鍵が隠れていると見てよいようである。

以下、用例の分析によって、指示詞「是」から繫辭「是」が生まれるまでの過程をたどってみたい。

まず『易經』の用例から見て行きたい。『易經/上經・下經』には「是」を指示詞とし

て単独に用いる用例はわずか次の二例だけである。

- 是 謂災眚
- 有孚失 是

この他に、「是」（「正しい」の意）を形容詞として用いる例は以下の一例のみである。

- 不見 是 而無悶
是とせられずして悶ゆること無し。

しかし、これは孔子のことに仮託しているとされる文言に現われた用例であるため、『論語』より遅いかせいぜい『論語』と同時代の用法と思われる。次に「是・……也」の用例を見てみる。

- 彖曰、泰、小往大來、吉亨、則 是 天地交而萬物通 也。（『易經・上經/泰』）
彖に曰く、「泰は小往き大來る、吉にして亨る」とは、則ち是れ天地交はりて萬物通ずるなり。
- 彖曰、否之匪人。不利君子貞。大往小來。則 是 天地不交而萬物不通 也。（『易經・上經/否』）
彖に曰く、之を否ぐは人に匪ず、君子の貞に利からず、大往き小來る」とは、則ち是れ天地交はずして萬物通ぜざるなり。

この2例の「是」は共に先行談話の内容を承ける指示詞の用法と見て間違いないようである。しかし次の例はどうであろうか。

- 子曰：「知之為知之、不知為不知、是 知 也。」（『論語・為政』）
子曰わく、「之れを知るを之れを知ると為し、知らざるを知らずと為す、是れ知る也。」（吉川幸次郎（1965）pp.44-45）

この「是」も結論からいうと、同じく指示詞として解釈するほうが妥当のようである。しかし、この「是」はただ単に先行談話の内容を承けているだけではないようであ

る。この「是」はすぐ直前にある「知之為知之、不知為不知」を指しており、意味的に実質的な主語名詞句「知之為知之、不知為不知」との間に照応関係を結びつつ、それに対してあくまでも形式的な主語として働いている。つまり、この「是」は述部名詞句に対する形式と意味という二重の主語構造をなしているのである。そして、こうした一見意味的にはまったく余剰に見えるこの「是」は、機能的にはもはや意味的な主語である「知之為知之、不知為不知」を照応することによってではなく、むしろそれを改めて聞き手に対して提示して示す意味において、「照応機能」を持ちつつもそれよりも「提示機能」が幾分優位に働いているように見える⁷。

しかし、この「提示機能」としてすでに一度談話に導入された内容を再確認する意味で、意味的な主語である「知之為知之、不知為不知」を改めて提示するというのに止まらざるを得ない。ここにこの「是」の指示性が著しく低下していることが認められる。そして、指示詞「是」のこうした「提示機能」が主語名詞句を形式的に提示しつつ、それと述語名詞句との意味関係を同一と判断し、叙述するという繫辞の「叙述機能」とはもはや紙一重に過ぎないように思われる。次の例を参照されたい。

- 長沮曰：「夫執輿者為誰？」子路曰：「為孔丘。」曰：「是魯孔丘歟？」曰：「是也。」
（『論語・微子』）

長沮曰わく、「夫の輿を執る者を誰と為す。」子路曰わく、「孔丘と為す。」曰く、「是れ魯の孔丘与。」曰く、「是れ也。」（吉川幸次郎（1965）p.295）

もし下線部の「是」を指示詞と解釈すれば、その指示対象は恐らく現場から少し離れたところにいると思われる孔子でなければならない。しかし、「孔子」は話し手長沮と聞き手子路によって展開されている談話に直接関わる存在ではないことは明らかである。それでは「是」が近称指示詞であることに抵触する。なぜなら、近称なら話し手に近いが又はその勢力範囲に属するものを指さなければならないが、この場合、「孔子」は明らかに話し手長沮と聞き手子路から見た第三者であり、しかも両者からみて「遠」に属する対象だからである。つまり一人長沮が優位に関わるような指示対象ではないため、

⁷ 指示詞の持つ二重機能については、例えば、東郷（1991）には「フランス語の ce N による照応は、先行名詞句との同一指示を示すと同時に、新たな情報を提示するという二重の機能を果たしているのであるが、どうやら日本語のコノ N による照応にはこのような二重の機能を兼務する力がないようである」という興味深い指摘がある（p.102）。

なお、拙稿（1994）では、談話において話し手と聞き手にとって了解済みの指示対象つまり談話の既知（given）の要素を指す場合の指示詞の機能を「照応機能」とし、聞き手にとってまだ了解していない要素を談話において提示する（give）場合の指示詞の機能を「提示機能」とした。詳しくは拙稿（1994）を参照されたい。

「是」よりも「彼」と指すのが自然だからである。ここではやはり話題になっている人物のことを、それがあまりにも自明であるが故に省略していると見るべきであろう。

そして、次の例についても同じことが言える。

- 桀溺曰：「子為誰？」曰：「為仲由。」曰：「是魯孔丘之徒與？」對曰：「然。」（『論語微子』）

桀溺曰わく、「子は誰と為す。」曰わく、「仲由と為す。」曰わく、「是れ魯の孔丘の徒与。」對えて曰く：「然り。」（吉川幸次郎（1965）p.295）

この「是」を仮に指示詞と解釈すれば、ここではその場にいる話し相手つまり二人称を指すことになる。指示詞から人称代名詞への転用は通言語的には決して希なことではないので、この「是」も人称代名詞へ転用したということになろう。しかし、同じ二人称代名詞ならこの「是」と「子為誰？」の「子」とは意味的に同じはずであり、構文的にも同じ構文を取らなければならない。しかし、この場合「是為魯孔丘之徒與？」になっていないので代名詞を主語とする疑問文の通例に抵触する。

これについては、「為」が省略されていると言えばそれまでだが、ここではむしろ「是」は繫辞的に機能する「為」と共起できない何かを持っているのではないかと考えたい。そしてその何かというのは、つまりこの「是」はもはや単純な指示詞ではなく、すでに繫辞として機能し始めていることではないかと考えられる。そして、仮に「是」が二人称を指し、しかも繫辞「為」が省略されたとすれば、「為」が省略されたのと同じ理由で二人称を指す「是」も省略されてしかるべきではないかと考えられる。なぜなら「為仲由」のように、代名詞の省略は繫辞よりも簡単に行われるからである。ここでもやはりあまりにも自明な存在であるため、二人称代名詞「子」が省略されたことによって、本来繫辞として被覆されるべき「是」が露出したのだと考えるのが妥当であり、自然であろう。繫辞「是」の最初の用例である⁸。

因みに、『論語・微子』の例にある「是也(述部)」も、前方照応的な指示詞の意味を濃厚に残しつつも、この「是也(述部)」からは、相手のいうことを是認する「然り（そうです・そのとおりです）」という意味がすでに窺われ、後に肯定詞と言われる「是」の先蹤をなすものと思われる。そして、次の例の「是也」は「それと同じようなもの」という「列挙、提示ひいては同一性」を表わしているようである。

⁸ここに挙げた2例については、これまでの先行研究はいずれも深く検討することなく、ただ因習的に指示詞「是」として解釈してきたが、これが会話の文脈に現れる「是」の用法であること、古代語・近代語だけでなく、現代語の談話においても、一人称代名詞と二人称代名詞が省略されるのを常とする中国語にあっては、いかにも自然な用法であり、強いて指示詞と解釈するに及ばないと考えられる。

- 滔滔者天下皆 是 也。(『論語・微子』)

滔滔たる者天下皆是れなり。

しかし、このような「是」には照応機能の影は薄く、まだ列举・提示するという意味において指示詞の提示機能が認められ、その意味で指示性が僅かながら残存していると考えられるのは、例えばこれを「同」に直してみれば、この文の意味がすなわち複数の要素の同一というふうになってしまうことから分かる。

ここに挙げた1例は、「是」の指示詞としての照応機能と提示機能とのどちらが優位に働くかの度合いこそ違うものの、まだようやく指示詞の領域内に踏み止まっており、その意味で次の形容詞「是(也)」と異なっている。

- 子曰、二三子、偃之言 是 也。(『論語・陽貨』)

子曰く、二三子よ、偃の言是なり。

この「是」は「正しい」という意味であり、品詞的にも形容詞と見て間違いないようである。そして、恐らくこうした「正しい」という意味の形容詞と意味的に派生関係にあると考えられるのは名詞「是非」の「是」ではないかと思われる。

以上に見た2例における「是」は、まだ否定繫辞「非」や「正しくない」という意味の「非」と意味的な対立をなしていた程度に過ぎないが、次の例に至っては、そうした意味的な対立は更に構文的な対立によって保障されているのである。

- 故王之不王、非 挟大山以超北海之類也。王之不王、是 折枝之類也。(『孟子・梁惠王』上)

故に、王の、まことの王たらざるは、大山をわき挟みて北海を超ゆるの類にはあらず、王の、まことの王たらざるは、これ枝を折ぐるの類なり。(金谷治(1966) pp.22-23)

これは『孟子』の用例であり、同じような用例はほかにも『孟子』に3例を数える。そして、同じ意味の「是」の単独用法もほかに2例ある。更に名詞「是非」の用例も4例ある。このように『孟子』に「是(肯定繫辞)」と「非(否定繫辞)」が呼応する用例と名詞「是非」の用例が共存していることは、『孟子』において「是……也」

(87 例)と「是也(述部)」(14 例)とが多数見られることは決して偶然ではなく、無関係でもなからう。

『孟子』は時代的に『論語』に遅れていることは確かなので、もし先に見た『論語』において既に繫辞「是」が萌芽をみたとすることが支持されれば、『論語』において、相手のいうことを是認する「是」や「正しい」という意味の「是」が観察され、『孟子』において、このような「是」と「非」の対比による構文と名詞「是非」が共存していることもすべて繫辞「是」の成立を前提する現象といえるかもしれない。

結論：

1. 繫辞「是」の用例は、「彗星図」よりも古いと思われる論語の 2 例(「長沮曰：「夫執輿者為誰？」子路曰：「為孔丘。」曰：「是魯孔丘歟？」曰：「是也。」『論語微子』と、「桀溺曰：「子為誰？」曰：「為仲由。」曰：「是魯孔丘之徒與？」對曰：「然。」『論語微子』)が最も古いものである。時代は春秋時代の末期にあたる。

2. 繫辞「是」の用法は名詞「是」や「是非」から生まれたのではなく、その前身は、「(前方照応的な用法としての指示詞的な機能を持つもの)……也」の文型においてその可能性が育まれ、そして、ついでは「是(前方照応的な用法としての指示詞的な機能と繫辞的機能が併存するもの)……也」における繫辞的な機能との二重機能において繫辞への傾斜を強め、ついにこの文型に含まれていた繫辞的な機能を分化して生まれたものとして見ることができる。

そして、もう一つ「是」の繫辞化にあずかって力があつたのは、「是也(述部)」の形で用いられる「是」の用法である。この「是」も最初は恐らく前方照応的な機能を持っていたと思われるが、慣用が進むにつれて、前方照応の用法から「列挙」の意味が派生し、ついで、相手のいうことが「正しい」という「是認」の意味が生まれ、これが繫辞文との構文的な類似と相まって、意味的に「是」の繫辞化に一役買ったものと思われる。

したがって、繫辞「是」は指示詞「是」からの転用であり、この転用はまず「是(主部)……也」と「是也(述部)」の構文によって構造的に保障され、これはさらに指示詞「是」の指示性の低下(機能的には、照応機能の低下に伴う提示機能の卓越、そして繫辞としての叙述機能の獲得があり、意味的には指示性優位な「列挙・同一性」から「正しい」という意味への意味拡張があつたものと思われる)と相まって、「是」の繫辞化が実現したものと考えられる。

3. 形容詞「是(「正しい」の意)」は、指示詞「是也(述部)」と文型「是……」

也」の慣用によってもたらされたものと見るべきである。熟語の名詞としての「是非」はこれをさらに抽象化して得られたものと考えられる。この名詞「是非」そのものは繫辞「是」の派生に直接貢献していないが、これは恐らく繫辞「是」の用法と形容詞「是」の用法を前提にして初めて生まれ得たものと思われる。そして、指示詞の「列挙・同一性」から「正しい」という意味の「是」への意味拡張にあずかって力があつたのは、既に繫辞「是」が生まれる前から早くも否定繫辞として機能していた「非」の存在である。この否定繫辞「非」が肯定を表わす繫辞「是」の対義語だけでなく、恐らく否定繫辞「非」から生じたであろうと思われる「正しくない」という意味の「非」と「正しい」という意味の「是」ともちょうど対義語関係にあつたからである。

以上のことを総合すると、指示詞「是」の繫辞化は恐らく次に示すような過程を辿つたものと思われる。

a. 指示詞「是」の単独用法は「是」の用法のなかでもっとも古いと思われるが、そこから「是……也」の形で用いられる指示詞用法と「是也（述部）」の指示詞用法に拡張された。そして、指示詞「是」の指示用法のうち、特に、「是……也」と「是也（述部）」の二つが繫辞「是」の発生にあずかって力があつたのではないかと考えられる。

b. 「是（主部）……也」と「是也（述部）」の形で用いられる「是」はその指示性の低下に伴い、同一性と是認を表わす意味から、主語名詞句と述語名詞句との論理的な同一性、或いは主語名詞句と述語名詞句との関係を是認する意味へと拡張し、機能的には、主題或いは主語を談話に導入する提示機能から、陳述を表わす叙述機能を有するようになったものと思われる⁹。これが「是……也」という Topic-Comment 構文の再解釈（reanalysis）を引き起こした契機ではないかと考えられる¹⁰。

⁹我々は更に古代日本語における指示詞「ソ」と係助詞「ソ」との語源的な関連に、指示詞の提示機能と陳述に関わる叙述機能との連続を見ることができる。

¹⁰Li, C. N. & Thompson, S. A. (1977) は王 (1958a, b) に従って、繫辞の「是」の前身を指示詞の「是」として、その発生のメカニズムを Topic-Comment 構造と Subject-Predicate 構造の間に使われる「是」は指示詞から繫辞へと再解釈（reanalysis）が行われたと指摘している (p.427)。そして、それを誘発したのは次のような、指示詞の解釈と繫辞の解釈という曖昧な文であるという (p.425)。

- 知而使之、是 不仁 也。 (『孟子』)
- 既欲其生又欲其死、是 惑 也。 (『論語』)

現象的には確かに指示詞だったものが繫辞になったのだから、その間に二通りの解釈が前後しているかぎりでは、いわゆる再解釈（reanalysis）という考えも成り立つかもしれない。しかし、それは現象の記述以上に、例えばその発生の動機づけを明らかにしたわけでは決してない。

筆者にとっては、こうした再解釈がなぜ行われなければならなかったのかということこそもっとも興味を

c. 繫辞「是」が生まれた最初のうちはまだしばらく文末に「也」を伴うという従来の判断文の形式によって保証されていたが、やがて完全に一人立ちした繫辞「是」は判断を表わす「也」との協同がなくても単独で使えるようになるに至る（彗星図の例）。そして、彗星図の用例において指示詞「是」と繫辞「是」が併用されるに至って、指示詞「是」からの繫辞「是」の機能の分離は完成したと見てよい。しかし、同じ時代においては、まだ繫辞「是」が義務的に用いられるまでには至っておらず、繫辞「是」が義務的に用いられるためにはその後もなお遙かなる道筋があったのである。

d. 「是也（述部）」は、肯定の文脈に使われるため、「そのようなもの（列挙や同一性を意味する）」意味と「その通り、そうです（是認する）」意味に拡張され、更に否定繫辞「非」との意味的な対立によって、「正しい」という意味が生まれた。

因みに、Sian L. Yen (1986) の指摘した肯定詞「是」は繫辞「是」の前身ではなく、「是」の繫辞化の c. ステージから d. ステージに移る過程において随伴的に現われた用法に過ぎない。

ここで、指示の機能を中心に、「是」の繫辞化の過程を敷衍してみると、次のようになる。もともと近称の指示詞であった指示詞の「是」は、まず人称領域でいう「是」の「非一人称化」（「非一人称」とは二人称と三人称が未分化のまま融合したものの謂いである）に関わる前方照応的な機能を持っていたが、この照応機能の低下に伴う、主題・主語の提示機能の顕在化をへて、陳述を表わす叙述機能が成立したということになる。指示詞の二つの機能のうち、「照応機能」の減退と同時に「提示機能」の増長ひいては叙述機能への拡張は、すなわち指示詞から繫辞が生まれることの前提条件だと考えられる。

引くところである。注意すべきは両氏のいう多義的な解釈が可能な文の内、『孟子』の 1 例は、『論語』の繫辞「是」の用例より遅く、『論語』の例もせいぜいそれと同じ共時的な相に属するものだけということである。もしそうだとすれば、いわゆる再解釈（reanalysis）は指示詞から繫辞が生まれたことに対する説明というよりは、単なる一種の結果追認的な便宜にすぎないとの誇りを免れない。何故なら、上記の『論語』の例については、「是」が指示詞から繫辞へと再解釈（reanalysis）が行われたという現象よりは、そもそも何故繫辞としての解釈が可能なかを問題にしなければならないからである。

一方、従来文字資料としてあまり注目されない石鼓文に「是」が 2 例使われていることに注目する必要がある。

- 周員止于 是。（第七鼓・呉人）
- 滔滔 是 熾、振振復古（第八鼓・而師）

「第七鼓・呉人」の「是」は近称の場所指示を表わす用法であり、「第八鼓・而師」の「滔滔是熾」は『論語』の「善人是富」と同じ構文をとるものである。因みに、後者は周の武王が殷の紂王を伐つ時に天に誓った言葉だとされ、古い語法を残したものである。年代も石鼓文とさして隔たりがない。しかし、この種の語法は『書経』以下、『論語』、『孟子』等では既に生産性を失ってしまったようである。因みに、石鼓文の年代については、尹（1992）は秦文公十三年（紀元前 753 年）前後二十年と推定している。

3 甲骨文字と金文における指示詞に関する仮説

前節では、先秦時代の指示詞「是」と繫辞「是」との関係を中心に見てきたが、それ以前の甲骨文字や金石文におけるその他の指示詞の存在については、これまで断片的に報告されているにすぎず、その全体像は明らかではない。本節は甲骨文字と金文における他の指示詞を見てみることにしたい。

王（1937）以降の中国語の繫辞についての研究は、最近もう一つ新たな展開を見せた。それは、古代中国語の繫辞は「是」をもって最初とし、先秦時代以前の古代中国語には繫辞は存在しなかったとする王（1937）の主張に対し、甲骨文字と金文、及び詩經における繫辞「惟」（「𠄎」「隹」「維」「唯」等の異体字を含む。以下特に明示しなければ「惟」を以て代表する）の使い方を指摘し、甲骨文字時代の中国語にすでに繫辞が存在していたとする周（1985）の説の出現である。

甲骨文字の「𠄎」と、「𠄎」と「隹」の関係については、周（1987）以前にも伊藤（1985）の研究があり、そこでは「𠄎」と「隹」との関係について、両者の共通点と相違点を含めて綿密に考察されており、「𠄎」と「隹」は、甲骨文の初期から後期にかけて後に来る語を強調して提示する「虚詞」から、選択・代替するために提示する「虚詞」に変わったと結論付けられている（p.163）。

伊藤（1985）の挙げた例で見る限り、甲骨文字における「𠄎」と「隹」は所謂前置詞（介詞）でもなければ、疑問を表わす副詞でもないことは容易に首肯できる。しかし、氏の指摘したような時間名詞、目的語、主語、主題など多種多様な語や成分を強調・提示する機能を担うものとしては、氏の「虚詞」による意味規定は余りにも大雑把にすぎる嫌いがあるのは否めない。

これに対して、伊藤（1985）の挙げた「𠄎」の用例をすべて「繫辞」またはその派生的な用法として解釈し、甲骨文字、金文だけでなく、『書經』、『詩經』以下、先秦時代の古代中国語にも繫辞「𠄎・隹（惟、維、唯）」があったとして提起されたのが周（1987）の説である。それを裏付ける例として、我々は更に『論語・里仁』から次のような肯定詞「唯」の用例を挙げることが出来る。

- 子曰、参乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。（『論語・里仁』）

この「唯」は相手の言うことを肯定する場合に使われるもので、現代語の繫辞「是」にもこうした肯定詞の用法が平行しているのと軌を一にする。しかし、これは発生的に

も原理的にも繫辞としての「惟」に先行する用法ではなく、「惟」の繫辞用法に付随しておこったものと考えられる。

ここで考えられるのは、このような「惟」の前身もかつては指示詞であった可能性があることである。これは甲骨文字・金文や先秦時代の「惟」にはなお指示性の残存と思われる用例があること、そして、「惟」にかつて指示性のあったことを仮定することによってはじめて合理的に説明することが可能な現象が幾つか存在することによって裏付けられる。

ここで想起されるのは、遠称指示詞「彼」と否定繫辞「非」との関連についての清・王引之の指摘である。

「彼」と否定繫辞「非」との関連については、清・王引之がその『経傳釋詞』において初めて仮説として提起されるところである。それによれば、「非」と「匪」があい通じ、更に「匪」と「彼」があい通じる¹¹としている。これは王（1937）において聞一多氏の説として一度間接的に紹介されたほか、管見の限り、周（1987）が古代中国語の否定辞「非」は「不唯」の合音であるとして、甲骨文字における繫辞「惟」の存在を立証するために触れた以外はほとんど注目されることがなかったようである。しかし、これは甲骨文字、あるいは甲骨文字から先秦時代までの指示体系を考える上できわめて示唆に富む考えである。

「惟」については、これまでの中国側の文献では、専ら虚詞として扱われ、その意味や語性は必ずしも明らかではなかったが、周（1987）においてそれを繫辞とする説が出されるに及んで、その構文に関わる機能が初めて明らかにされた。しかし、その前身については、鈴木（1994）を除けば、指示詞とする考えはついに示されることはなかった。

今のところ、「惟」がもとは近称指示詞であったことの直接的な根拠として指摘できるのは、およそ次の三点である。

¹¹ 「匪」が遠称指示詞として「彼」に通じる例は、『詩經』に見られる。例えば、

- 莫高 匪 山、莫浚 匪 泉、君子無易由言、耳屬于垣。（『小雅・小弁』）

なお、黄（1983）はこのような「匪」の用例が『詩經』にしか認められないとして、指示体系の歴史に関わる現象ではなく、あるいは方言ではないかと推している。ここに挙げたのは「小雅」の例であるが、他にも「匪」を方言とするには、その用例は「小雅」の他「檜風」以下少なくとも三つの「國風」に涉っており、分布が広すぎるようである。仮に方言であったとしても方言には歴史的に古層の言語を残存させている可能性もある。ここで筆者はこのような「匪」の用法は『詩經』にしか見られないが、その分布がかなり広いことを「匪」の古さを物語るものとして解したい。とすれば、金文あるいはそれ以前の甲骨文字の「匪(非)」の中に或いは遠称指示詞としての「匪(非)」が紛れ込んでいる可能性が十分にある。今後の調査が待たれる。

- 『大廣益會玉篇』に「惟 弋隹切思也有也辞也爲也謀也伊也」と注していること。
- 「維・惟」は訓点語では、「これ・この」と訓まれ、「是・之」に通じること。
- 「不惟」の合音とされる「匪(非)＝彼」が遠称指示詞であること。

まず第1点については、漢・許慎『説文解字』では、「惟 凡思也 从心隹聲」と解するだけで、清・段玉裁『説文解字注』によれば、『方言』以下の多くの字書が同じ解釈をしているようである。そうした中で、梁・顧野王『玉篇』(宋・陳彭年等『大廣益會玉篇』による)には、「惟 弋隹切思也有也辞也爲也謀也伊也」と注しているのが注目される。ここで「思也」を先に挙げているのは恐らく先秦時代以降の文献時代における「惟」の最も一般に用いられている意味だからであろう。しかし、「有也」、「爲也」と並んで、「伊也」と注しているのは興味深い。先ず、「有」と「爲」は古代中国語においては、前者は存在詞として、後者は繫辞的な機能を持つとされるものであり、文献時代の「惟」は例え繫辞そのものではなくても、繫辞的な機能を持つ語に通じていたことの証であろうと思われる。そして、「伊」とはつまり近称指示詞「伊」のことに違いない。これによって文献時代の「惟」の前身をかなり明らかにすることが出来る¹²。

第2点については、これまでは周(1987)をはじめ、「匪(非)」と「不惟」との関係性を専ら音韻の側面から論じられているが、このように、繫辞「惟」の前身を近称指示詞とすることによって、近称「惟」の否定「不惟」がすなわち遠称「彼・匪」になるという意味的な側面からの補強が得られる。これまでは必ずしも明瞭にされなかった「彼」と「匪(非)」との関係もこれによって明らかになると思われる。

そして、第3点、訓点語で近称「維」を「これ」と訓む例については、まず例えば

- 維 天平寶字六年歲次壬寅二月八日菩薩戒佛弟子百濟豐虫奉爲敬写法華經一部、金光明最勝王經一部金剛般若經一卷理趣經一卷本願藥師經一卷合廿一卷莊嚴即了。
(『西大寺本金光明最勝王經・卷一』)

¹²もちろん、『原本玉篇』が残巻を残すのみとなった現在、この注釈がそのまま梁・顧野王の『原本玉篇』にあったと断定することは出来ない。しかし、『方言』、『説文解字』以下数多くの辞書が等しく「思也」と注しているのに対し、『玉篇』だけが、「有・爲」と「伊」によって注していることから推して、恐らく『玉篇』のみが「惟」の古義を伝えていると考えるほうが自然ではないかと思われる。因みに、文献時代の「惟」には、既に「思」の意味が優勢になり、その他の意味はほとんど痕跡に等しくなったうえ、宋の時代においては有史以来の文献からはおろか、恐らく伝来の古字書から以外には「惟」の原義を知る手がかりは得られなくなったのではないかと考えられる。仮にこの注が宋・陳彭年等によって補われたものであったとしても、依拠するものがあつたに違いない。もし宋・陳彭年等が『方言』、『説文解字』以下数ある字書とは別に参考するものがあつたとすれば、それはやはり『原本玉篇』のことではないかと考えられる。

- 維（コレ）是（レ）勉（ツトメヨ）（『東洋文庫藏夏本紀鎌倉期點』築島（1963）より）

のようなものが挙げられよう。

前者の「維」は現に春日（1942）が「これ」と訓んでいるように、恐らく「これ」と読んで間違いないところであろう。そして、これは写経した人の後書きにあるものであり、天平寶字六年とは西暦 762 年、奈良時代の末期にあたる。原典にある用法ではないが、少なくとも奈良時代の日本においてこのような「維」がまだ生産的に用いられていたこと、これには恐らく「これ」の訓が当てられたであろうことはこれによって明らかである。ここで注目したいのは、このような年号日付の前に冠された「維」は、古くは例えば次の例のように甲骨文字や金文の「𠂔・隹」にもあった用法だということである。

- 癸酉卜、𠂔貞、雀由今日𠂔？（甲骨文字・丙編 2.63）
- 王曰：𠂔其出、其隹丁。丁不出、其出疾。（甲骨文字・存附一）
- 唯三月丁卯、師旃眾僕不從王征于方。（金文・師旃鼎）

とすれば、訓点語で「維」を「これ」と訓んでいるのは、やはり依拠するところがあつてのことと考えて差し支えない。つまり、「隹」の指示性の残存がこうした訓読を生んだのではないかと考えることができる。

これを裏付ける用例として、我々は更に変体漢文から次のような例を挙げることができる。

- 塩阜 惟阜之南有鹹水 方三丈許 與海相闊 卅里許（『播磨國風土記・揖保郡』）
塩阜（しほをか） 惟（この）阜（をか）の南に鹹水（しほみづ）あり。方（たてよこ）は三丈（みつゑ）ばかり、海と相闊（あひさか）ること卅里（みそさと）ばかりなり。（秋本（1958）p.289）

そして、この「隹」の指示性ととも、すでにかろうじて遙か遠い昔の面影しか止めていないのであれば、伊藤（1985）の指摘したような「𠂔・隹」によって卜占の中心となる語句を強調・提示する働きのあることも、或いはこのような指示性の存在を前提にし

てはじめて了解されることではないかと考えられる¹³。

因みに、これを補強する例としては、我々は更に、『書經』にある「惟」の単なる繫辞ではないことを示す用例を挙げることが出来る。

- 越百姓里居、罔敢涵于酒。不惟不敢、亦不暇。(『周書・酒誥』)

ここの「不惟」は「罔敢涵于酒」の単純否定ではなく、「亦不暇」の「亦」が示しているように、「恐くてそうしないだけではない」という限定を表わす意味が読み取れる。このような限定を表わす「惟」の用法と所謂繫辞「惟」とはどう関係するのかについては、『書經』の時代或いはそれ以前の時代において、繫辞として肯定判断を表わす意味から限定を表わす意味が生じたのだと推測されるよりは、或いは繫辞「惟」が生まれる前に、「惟」は近称というきわめて特定性の高い指示性を持っていたことの現れではないかと思えるほうが自然な解釈のように考えられる。

因みに、もし仮にこの「惟」も近称の指示性を持ったものとするのが許されれば、ここにいう「匪・彼」の意味はまさに「不惟」つまり「近称」ではないところの「遠称」ということにほかならない。つまり、ここで考えられるのは、遠称「彼・匪(非)」は近称「惟」からそれを否定することによって音韻的には「不惟」に、意味的に「非惟」によって分化したのではないかということである。甲骨文字から先秦時代にかけての古代中国語の指示詞における「近称(惟・此・是)」と「遠称(匪・彼・其)」との意味的な対立もまさにこのような「惟・此・是」に対する否定としての「匪・彼・其」にあることもこれを裏付けているように思われる。そして、古代中国語の指示詞「此・彼」と人称との関わりもとりのみならず「此」の「一人称」に対する「彼」の「非一人称」という「一人称対非一人称」の対立であることも、これを人称領域画定の側から裏付けるものとして注目してよい¹⁴。

ここで、もし仮に「惟」がもともと近称の指示性を持つ指示詞であったという仮説が成立し、遠称「彼」と「匪(不惟)」があい通じるという清・王引之『經傳釋詞』の主張が正しいとすれば、「匪(非)」は「彼」と意味的に関係し、甲骨文字における指示体系を考えるための有力な手がかりが得られる。そして、恐らく以下の仮説が成り立つで

¹³筆者との考え方や論証の仕方が違うが、先秦時代の「惟」を「虚詞」としながら、もともとは近指の指示詞であっただろうとする説は鈴木(1994)にも見える。そこでは、近指「惟」に対するものとして遠指「夫」が論じられているようである。いまのところ筆者はこれについて論評するだけの資料的な準備を持ち合わせていないので、さらなる考察は他日に期したい。

¹⁴管見の限り、人称との関わり方によって古代中国語の指示詞の機能をとらえた最初の研究は江戸時代の漢学者皆川淇園(1734-1807)である。詳しくは拙稿(1998)を参照されたい。

あろうと思われる。

つまり、指示詞「是」以前の指示詞は惟と彼（不惟、匪）の対立をなし、「惟」も指示詞から繫辞へと変化したものではないかと考えられる。そして、「惟」は「近称」で、その否定が「遠称」の「不惟（匪＝彼）」であり、その否定的な意味はいわゆる否定繫辞「非」であったということになる。そして、指示詞「惟」は後に繫辞化したのに合わせて、指示詞「惟」が指示詞「是」に取って代られたものと思われる。従って、指示詞「惟」と繫辞「惟」から指示詞「是」をへて繫辞「是」が生まれるまでの過程には以下四つの段階があったと考えられる。

- a 惟 1（近称指示詞） ⇔ 不惟（匪・彼）（遠称指示詞）[甲骨文字]
 惟 2（肯定の繫辞） ⇔ 「非・匪」（否定繫辞）[甲骨文字]
 ↓
 b 惟（肯定の繫辞） ⇔ 「非・匪」（否定繫辞）[甲骨文字]
 時・是（近称指示詞） ⇔ 匪・彼（遠称指示詞）[甲骨文字、『詩經』、『書經』]
 ↓
 c 是 1（近称指示詞） ⇔ 彼（遠称指示詞）[金文『詩經』以降の諸文献]
 ↓
 是 2（形容詞「正しい」の意） ⇔ 非（「正しくない」の意）[『論語』等]
 ↓
 是 3（名詞「正しいこと」の意） ⇔ 非（「正しくないこと」の意）[『論語』等]
 ↓
 d 是 4（肯定の繫辞） ⇔ 非（否定繫辞）[『論語』、彗星図、『論衡』等]
 此（近称指示詞） ⇔ 彼（遠称指示詞）[金文『詩經』以降の諸文献]

この甲骨文字以降の指示体系と指示詞の繫辞化の過程に関する仮説を積極的に支持すると思われるのは、先秦時代の「惟」はまだ、指示詞の彼に対する「惟」と否定繫辞「非」に対する繫辞の「唯」の両義性を持っていたということを示す用例が『書經』にあるという事実である。次の例がそれである。

- 帝曰、俾予従欲以治、四方風動。唯乃之休。（『書經・大禹謨』）

この例の「唯」が先行する「俾予従欲以治、四方風動」と照応していることは明らか

である。次の『論語・為政』の例における「是」と酷似していることは恐らく指摘するまでもなからう。

- 子曰：「知之為知之、不知為不知、是知也。」（『論語・為政』）

しかも、「是」よりも幾分繫辭に近いように感じられるのは、「唯乃之休」という判断文の述部に「也」が用いられていないことから窺われる。因みに、この例の下線部を、宋・蔡沈が「是乃汝之美也」（十三經注疏本『書經集注』による）と注しているのは正にこれを指示詞だと考えてのことであると言って差し支えない。そして次の2例は恐らく繫辭「惟」と解してよいと思われる。

- 已、予惟小子。（『書經・大誥』）
- 禹曰：兪哉。帝光天之下至于海隅蒼生、萬邦黎獻、共惟帝臣。（『書經・益稷』）

ここで問題なのは、現在解読されている甲骨文字の「隹」の用例は殆ど繫辭として解釈されるのが妥当なようなものばかりで、近称指示詞「隹」と断定できる用例はまだ見つからないことである。これについては、勿論「隹」の指示用法は甲骨文字という簡略な文体又は甲骨文字の解読状況に制限されている可能性も否定できないが、或いは「隹」の繫辭化は甲骨文字において既にその語源をもほとんど意識させないほどに完成したのではないかと考えられるかも知れない。それに加えて、「匪(非)」の用例に遠称を表わす意味として解釈できるものも管見のかぎり甲骨文字や金文には見当らなくて、遠称「彼」の甲骨文字や金文の例も先行研究によって報告されていない点も気になる。これについては、甲骨文字の「匪(非)」の中に「彼」と解すべき例が紛れ込んでいる可能性もあるので、いまのところ詳かにしない。

因みに、これまで報告されている甲骨文字における指示詞は「之」、「茲」（管（1953））だけであること、「之」は後の時代の「是」の用法と殆ど同じとされている（徐（1990））ことを考えれば、ここに遠称の指示詞がないのが如何にも不自然である。これについては、甲骨文字の文体故に遠称の指示詞が現われにくかった可能性も否定できないが、指示詞そのものがまだ十分に発達していなかった可能性もある¹⁵。ともあれ、もし仮に「隹」が近称の指示詞であったとすれば、「匪(非)」が遠称の指示詞であった可能性もあ

¹⁵ 近称指示詞から遠称指示詞が分化するという現象は上代日本語の「コ系」指示詞から「カ系」指示詞が母音交替によって分化したことに認められる。

ながちあり得ないことではない。

一方、金文における遠称指示詞「其」については、管（1981）によって23例報告されているが、何れも連体修飾語として使われており、近称指示詞「之」は20例の内目的格が7例、連体修飾語が13例報告されている。「之」は後の時代において近称指示詞から所有格を表わすものに変わっていることを考えれば、この「之」の文法化の過程にもきわめて興味深いものがある。恐らく「之」の指示詞から所有格を表わす助詞への文法化が新たな指示詞「是」（「其」も含めて）の出現を導いた可能性が高いように思われる。そして、『論語』以前の先秦時代の文献では、「是」の繫辞化より先に「此」と「是」はその現場指示と前方照応の用法においてすでに重なりつつあったように、「此」も「是」の文法化に一役買ったことに注意する必要があるだろう。

とすれば、近称指示詞に限っていえば、甲骨文字から金文にかけて、近称指示詞「隹」が繫辞化していったのに合わせて、新たな近称指示詞「之」が現われ、そして、金文から先秦時代の文献にかけて、その「之」が所有格へと文法化していくのに合わせて、新たな近称指示詞「是」が出てきた。更に『論語』前後の春秋時代において「是」が繫辞化していったのに平行して、指示詞「此」が現われたというふうな具合である。あたかも起こるべき「隹」の繫辞化のために、近称指示詞「之」が、「之」の所有格助詞化のために、「是」が、そして、次に起こるべき「是」の繫辞化のために、近称指示詞「此」が用意されていたようなものである。因みに、近称指示詞「是」が同じ近称指示詞「之」の意味機能をそのまま受け継いだのと同様、「惟」から「是」への移行も、ただ単に語彙の交替であり、「是」がそっくりそのまま「惟」の意味、機能を襲ったばかりではなく、その繫辞への文法化もそのまま踏襲したものと思われる。そして、古代中国語における近称指示詞の文法化はこの「是」の繫辞化を以て一応幕を閉じたのである。その後の古代語の指示体系は基本的に近称指示詞「此」と遠称指示詞「彼」の対立を軸として、文脈指示には「其」を用いるという三者対立の構造に安定するのであるが、それは更に古代語から近代語にかけて、「這」と「那」による二者対立の構造に取って代わられることになる。しかし、こうした指示体系の語彙的な交代とは裏腹に、古代語から近代語をへて現代語にかけて一貫して変わっていないのは、近称指示詞「此・這」が「一人称」に、遠称指示詞「彼（其）・那」が「非一人称」にそれぞれ対応するという人称対立の構図である¹⁶。

¹⁶因みに、古代中国語から現代語にかけてこうした人称対立の構図が一貫して変わらなかったのに対し、日本語の指示体系は上代語から近世後期の江戸語にかけて、それ以前の「コ・ソ」の二元対立から、「コ・ソ・カ（ア）」という三者対立の構造に変わっていることは周知の事実である。そして、上代語から近世後期江戸語にかけて、指示体系は「一人称対非一人称」の二者対立から、「一人称対二人称」を軸として、その外郭に

参考文献：

- 秋本吉郎（1958）『風土記』日本古典文学大系、岩波書店
- 伊藤道治（1981）「有關語詞『重』的用法問題」『古文字研究』第六輯、pp.251-262.
- 伊藤道治（1985）「卜辞中「虚詞」之性格—以由与隹之用例為中心—」『古文字研究』第十二輯、pp.153-165.
- 尹 博靈（1992）『石鼓文鑑賞』江蘇教育出版社
- 王 力（1937）「中国文法中的繫詞」『清華學報』第十二卷第一期、pp.1-67.
- 王 力（1958a）『漢語史稿（上冊）』科学出版社
- 王 力（1958b）『漢語史稿（中冊）』科学出版社
- 王 力（1981）『古代漢語（修訂本第一冊）』中華書局
- 春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究』岩波書店
- 金谷 治（1966）『孟子』新訂中国古典選、朝日新聞社
- 管 燮初（1953）『殷墟甲骨刻辭的語法研究』中国科学院
- 管 燮初（1981）『西周金文語法研究』商務印書館（北京）
- 裘 錫圭（1979）「談談古文字資料對古漢語研究的重要性」『中國語文』1979年第6期、pp.437-442.
- 洪 誠（1958）「論南北朝以前漢語中的繫詞」『語言研究』1958年第2期、pp.1-22.
- 黃 盛璋（1983）「先秦古漢語指示詞研究」『語言研究』1983年第2期、pp.136-157.
- 周 法高（1959）『中国古代語法・稱代篇』中央研究院歷史語言研究所（台北）
- 周 法高（1987）「論上古漢語中的繫辭」中央研究院歷史語言研究所集刊第五十九本『李方桂先生紀念論文集』第一分、中央研究院歷史語言研究所（台北）、pp.89-113.
- 徐 中舒（1990）『甲骨文字典』四川辭書出版社
- 鈴木直治（1994）『「惟」について』『中国古代語法の研究』汲古書院、pp.99-136.
- 席 澤宗（1978）「馬王堆漢墓帛書中的彗星図」『文物』1978年第2期、pp.5-9.
- 「三人称」を配するという三者対立へと変化し、そして現代語では「ソ系」指示詞がいわゆる「対立型」指示に深く関わっているようである。詳しくは拙稿（1998b）、拙稿（1999）を参照されたい。
- 古代中国語と古代日本語の指示体系の史的変化を通観して、指示体系の史的変化を促す語用論的動機付けについては、恐らく次のような仮説が立てられると思われる。
- 日本語における対人関係の原理は、「上・下」の関係と「内・外」の関係で見れば、「内・外」の原則が「上・下」の原則を支配するのに対して、中国語における対人関係の原理は、「上・下」の原則が「内・外」の原則を支配するものである。これがつまり中国語の指示詞が一貫して二本立てを基本とし、しかも一貫して「一人称対非一人称」の人称対立をなすのに対し、日本語の指示体系は二本立てから三本立てへと変化し、指示詞における人称対立も「一人称対非一人称」から、「一人称対二人称」それに「三人称」という三者対立に変わっていったということの語用論的な動機ではないかと考えられる。

- 築島 裕 (1963) 『平安時代の漢文訓讀につきての研究』 東京大學出版會
- 程 湘清 (1984) 『兩漢漢語研究』 山東教育出版社
- 東郷雄二 (1991) 『L'anaphore, cet obscur objet de recherche』 フランス語の<指示形容詞 CE + 名詞句>照応 — 談話における情報と視点 — 『人文』37集、京都大学教養部、pp.92-112.
- 馮 春田 (1984) 「從王充『論衡』看有關係詞‘是’的問題」 程 湘清 (1984) 『兩漢漢語研究』 pp.341-364.
- 容 庚 (1929) 「周金文中所見代名詞釋例」 『燕京學報』 第六期、pp.1041-1046.
- 吉川幸次郎 (1965) 『論語 (上・下)』 朝日新聞社
- 李 長波 (1994) 「指示詞の機能と『コ・ソ・ア』の選択關係について」 『國語國文』 第六三卷第五号、pp.37-54.
- 李 長波 (1997) 「皆川淇園の言語研究 — その言語觀を中心に —」 *Dynamis*, Vol.1, pp.113-134.
- 李 長波 (1998a) 「皆川淇園の言語研究 — その意味論と構文論的な試みを中心に —」 *Dynamis*, Vol.2, pp.55-79.
- 李 長波 (1998b) 「日本語の指示体系の史的變化について」 『國語國文』 第六七卷第十二号、pp.18-38.
- 李 長波 (1999) 『日本語定称指示詞の歴史的研究』 京都大学大学院人間・環境学研究科 平成十年度博士学位論文
- Benveniste, É. (1966) 'La nature des pronoms', *Problèmes de linguistique Générale*. Gallimard, 1966, pp.251-257. (日本語訳: 「代名詞の本質」 『一般言語学の諸問題』 岸本通夫監訳、みすず書房、1983、pp.234-241.)
- Li, C. N. & Thompson, S. A. (1977) 'A Mechanism for the Development of Copula Morphemes' Li, C. N. (ed.1977) *Mechanisms of Syntactic Change*. University of Texas Press, pp.419-444.
- Sian L. Yen (1986) 'The origin of the Copula *Shi* in Chinese', *Journal of Chinese Linguistics*. Vol.14, No.2, pp.228-242.

Summary

On the Demonstratives in Archaic Chinese and Their Grammaticalization

Chang bo LI

The author first discusses how the copula 'shi (是)' was grammaticalized from the demonstrative 'shi (是)' of archaic Chinese. In the process of the grammaticalization the sentence pattern of 'shi (是)' (as the subject & the topic) + (the predicate & the comment) 也] is the syntactic source, and another source from the semantic domain involves the usage of 'shi (是)' (as the predicate & the comment)' to mean correct. The author proposes that in the process of grammaticalization from a demonstrative to a copula we usually see the anaphoric function deteriorate and the presentational function predominate over the anaphoric function. Finally the predicative function is acquired. We find the first usage of the copula 'shi (是)' in the *Analects of Confucius* (論語).

Secondly, the author hypothesizes concerning the system of demonstratives in ancient Chinese hieroglyphic characters left on bone and tortoise carapaces (甲骨文字) and in archaic Chinese, taking up the following four points:

- 1) In ancient Chinese hieroglyphic characters left on bone and tortoise carapaces (甲骨文字), the copula '重·隹' was used.
- 2) The copula '重·隹' used to be a proximal demonstrative.
- 3) While the negative meaning of the proximal demonstrative '隹' = '不隹' was the distal demonstrative '匪(非)·彼', in the semantic domain, the negative meaning of the copula '隹' was the negative copula '匪(非)'.
- 4) The proximal demonstratives '隹·是·此' in archaic Chinese were used in indicating the antecedent concerning the first person, and the distal demonstratives '匪·彼·其' were used in indicating the antecedent concerning the non-first person.